丸　子　山　遺　跡

県道三隅美都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０年 ３月
益 田 市 教 育 委 員 会

序

益田市は高津川と益田川によって形成された広い平野部を抱え、後背の山間部には広大な広葉樹林を擁し、この恵まれた自然の恵みと穏やかな気候により古くから人々が生活していたことを示す多くの遺跡が市域全体に数多く分布しています。

さて、このたび県道三隅美都線改良工事に伴い丸子山遺跡の発掘調査を実施したところ、中世遺跡の一端が明らかになり、貴重な資料を得ることができました。

益田川上流域に位置する美都町については、近年の発掘調査により、中世を中心する重要な埋蔵文化財が発見されています。その成果から、中世益田氏との関連が一段と注目を集めるところとなりました。今回の調査地、宇津川地区の養老谷集落は、三隅川の上流に位置し、平安時代の養老瀧伝説が残る興味深い地域でもあります。今回の中世期における集石遺構の検出により、丸子山が養老谷集落の信仰対象として位置づけられ、当時の風習に触れることができたことは有意義なことであります。

こうして地域の歴史や文化財保護に対する理解と関心を深めるうえで広くご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたって全面的にご協力をいただきました多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成22年3月

益田市教育委員会
教育長　三浦正樹

例　言

本書は2008(平成20)年度に、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所の委託を受け実施した県道三隅美都線改良工事に伴う丸子山遺跡の発掘調査報告書である。

1．発掘調査は平成20年7月2日から同年7月18日まで行い、一時中断し9月に再開、完了した。

2．調査に要する経費は島根県益田県土整備事務所が負担した。

3．発掘調査を行った地番は島根県益田市美都町宇津川ハ1089番地である。

4．調査は下記の体制で行った。

調査主体	益田市教育委員会
事務局	益田市教育委員会文化財課
調査員	同　主任主事　大野芳典
調査補助員	同　嘱託職員　池本　篤　世良　啓
調査指導	島根県教育庁文化財課　是田　敦
	島根県文化財保護審議会委員　田中義昭
	益田市文化財保護審議会会長　村上　勇
	浜田市教育委員会　榊原博英

5．現地調査、資料整理については、上記調査指導の先生方の他、以下の方々から有益なご助言をいただいた。(五十音順、敬称略)
大庭康時（福岡市教育委員会）、小野正敏（国立歴史民俗博物館副館長）、中村友博（山口大学人文学部教授）西尾克己、守岡正司（島根県教育庁文化財課）、渡邉友千代（益田市匹見上地区振興センター長）

6．調査に従事していただいた方々は次のとおりである（敬称略）。
○発掘調査作業　潮一男、梅津照子、岡原良夫、花本清勝、藤岡千鶴子
○室内整理作業　梅津照子、岡原良夫、藤岡千鶴子、野村初恵、又賀大輔

7．挿図中の方位は磁北を示す。

8．本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は益田市教育委員会で保管している。

9．本書の編集及び執筆は大野が行った。

第１章　調査の経緯と経過

１．事業概要

事業者である島根県益田県土整備事務所は、県道三隅美都線改良工事に伴い、平成 19 年 12 月 21 日付けで分布調査を益田市教育委員会に依頼した。益田市教育委員会は、工事対象地の一部が鍛冶平鈩跡周辺であること、古代の養老瀧伝説や中世の養老谷城跡に関連する集落と推測されることから、試掘調査を実施することを報告した。

２．埋蔵文化財の取扱

益田市教育委員会は、対象地に試掘調査を 10 箇所実施し、掘削予定の山頂部における雑木の茂みの中で集石の一部を確認した。養老谷集落の中央に位置する丸子山周辺には、近代の祠跡や近世の墓所が残っており、その集石が何らかの遺跡である可能性を持つと判断した。一方、残土処理関連の山裾では鉄滓を含んだ石垣や、木炭や鍛冶滓を含む土坑４基を確認した。これらの結果をもとに平成 20 年４月８日付けで発掘調査の必要性を協議した。

これを受けた事業者は、事前に発掘調査が必要との承諾をふまえ、平成 19 年度当初から山頂部での試掘調査の継続と鍛冶平鈩跡の本調査について、平成 20 年６月 11 日付けで委託契約を締結のうえ、発掘調査を実施することとなった。

試掘調査の追加を６月 23 日から実施した。山頂部の集石について、雑木の伐採後に東西約５ｍの範囲に石が集中し、時期は不確定であるものの、規則性を持つ集石遺構と判断し、平成 20 年７月４日付けで遺跡発見通知を提出した。遺跡名は、山頂部周辺の墓など時期が不確定であるものも含めて丸子山遺跡とした。

事業者より平成 20 年７月７日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出され、益田市教育委員会から島根県教育委員会に対して平成 20 年７月 10 日付けで埋蔵文化財発掘通知を提出した。

３．発掘調査の経過

発掘調査は、丸子山山頂部を７月から本調査、北側斜面や集石南側に残る墓らしき集石を工事時での立会調査で対応することとした。

山裾の鍛冶平鈩跡について、計画変更で盛土対象地となり、遺構は一部半裁状態ではあるが、現地に保存されることとなった。遺跡の面積は、推定 100 ㎡である。

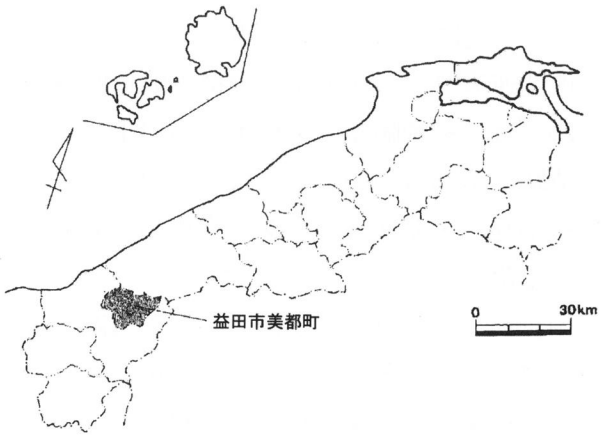
本調査の着手は７月中旬に開始し、７月 18 日には、遺物を取り上げ後の集石を残した状態で一時中断し、南側の工事立会調査と兼ねて９月の下旬に再開した。

なお北側斜面、南側の立会調査では遺構や遺物は検出されなかった。

最終的な本調査と立会調査面積は約 100 ㎡である。

平成 21 年度には資料整理を実施し、報告書作成を取り組んだ。

調査の成果は、市内の発掘調査速報展や美都町内公民館の各種講演会、文化祭等に展示・報告し活用した。



第１図　益田市美都町の位置

第２章　丸子山遺跡の位置と環境

１．地理的環境

遺跡の位置

丸子山遺跡は島根県益田市美都町宇津川に所在する。遺跡のある美都町は、中国山地の嶺線に近い山間地帯に位置し、益田市の東南部を占める。

主要河川としては東南部の春日山に源を発し、町域を西下して日本海に注ぐ益田川と、三隅川の支流である板井川、矢原川、丸茂川がある。生活域はこれら河川の流域に形成された盆地状の平地に展開する。すなわち、西から益田川筋の東仙道地区、都茂川との合流地が都茂地区、矢原川筋が二川地区である。宇津川地区は二川地区に含まれる。

ＪＲ益田市駅からは国道 191 号線を経て、直線距離で南東部に約 25km の距離にある。

中国山地に流れを発する三隅川は、山間部を北流して日本海へ注ぐ。丸子山遺跡はその支流、矢原川が形成する小規模な盆地の中央部に立地する「丸子山」の山頂部である。標高は約 196ｍ、川との比高は約 40ｍである。

２．歴史的環境

以下では丸子山遺跡を中心とする周辺地域、主に美都町の遺跡の概要を各時代について述べる。なお文中の（数字）は第１表の番号と対応している。

古代

縄文時代の遺跡としては、二川地区に位置する黒曜石や石斧、晩期土器が出土した本郷遺跡（49）、東仙道地区の前遺跡（61）では浅鉢が出土し、晩期の遺跡として知られる。

弥生時代の遺跡としては、酒屋原遺跡では前期の土器が出土し、龍光遺跡（68）、下都茂原遺跡（74）、大年ノ元遺跡（65）、唐干田遺跡（64）では流れ込みと思われるが、後期の土器が出土し、集落の存在が窺える。

古墳時代では、後期以降の横穴式石室を主体部にもつ三谷古墳（４）が代表的である。２基現存し、割石積みのやや胴張状無袖石室であり、三谷川に沿う平地を見下ろす山腹に開口している。三谷川筋の平地に古代集落を形成していった村落的首長層が葬られたものと推定できる。

奈良・平安時代には、古代政権がまとめた記録、『続日本後紀』の承和３年（八三六）、『日本三代實録』の元慶５年（八八一）の記事で、「都茂郷丸山」での銅山開発に関するものが記載されている。９世紀代にこの銅山操業に当時の政府が本腰を入れて取り組んでいた様子が窺える。

酒屋原遺跡では、多数の古代須恵器と円面硯数点、豊富な輸入陶磁器が大量に出土し、古代の役所関連遺跡から在地領主の拠点的遺跡への変遷を推測させる貴重な遺跡である。また下都茂原遺跡では、緑釉陶器、黒色土器が出土し、役所関連遺跡として注目される。唐干田遺跡、大年ノ元遺跡、本郷遺跡からも古代から中世にわたる土器が出土しており、それぞれの地区で中核的な集落が存続・発展しつつある様相が垣間見られる。

中世以降

中世前半の遺跡としては、粟島原遺跡（57）と東仙道土居遺跡（58）が特に注目される。粟島原遺跡は三谷川筋の河岸段丘上に位置し、同安窯系青磁碗、白磁皿、白磁合子、湖州鏡などが副葬された墓地で、東仙道土居遺跡においては、三谷川と益田川の合流点付近に位置し、館推定地の一画から五輪塔や日引石製宝篋印塔とともに褐釉四耳壷、常滑系壷、土師質土器壷を蔵骨器とした集石墓が発見されている。東仙道地区に有力な土豪勢力が盤距していたことが想定される。

中世後半の遺跡としては、都茂地区山本の大年ノ元遺跡、丸茂の森下遺跡（68）が注目される。大年ノ元遺跡は益田川の扇状地にあり、銅精錬に関する方形竪穴建物や掘立柱建物数棟が検出され、周辺から陶磁器類・銅滓が出土している。丸茂城の東側に位置する森下遺跡では、青白磁梅瓶や天目茶碗等の出土により在地領主丸茂氏の館跡と推定されている。

二川地区の中世遺跡としては、湖州鏡が出土した本郷遺跡のほか、室町時代頃の青磁、備前が出土した大切遺跡（市営住宅地周辺）（72）がある。

三隅川流域の山城では、宇津川城（17）が宇津川の中心地、矢原川右岸へ北に向かって突き出る尾根突端にある。宇津川要害とも称し、築城時期は不明であるが、弘治二年（一五五六）七月四日の益田藤兼感状（俣賀文書）に「宇津川城」とみえ、毛利氏と益田氏との間で激しい戦闘が展開されたという。周辺には竪堀等をもつ板井川城（16）、丸茂城（19）が築かれ、益田氏と、毛利氏や三隅氏との間での緊張が窺える。

中世において、益田氏は南北朝期に三宅御土居を築き拠点とした。その前段階の鎌倉時代には東仙道を拠点としたと考えられている。これら益田川上流域での遺跡調査からの具体的な様相の解明が今後の研究課題である。

また、銅山経営の発展により、都茂地区、中でも山本地区は江戸時代には大森銀山の支配下にあり、「銀山天領地」として隆盛を極めたと伝えられている。能登川の谷沿いに残る屋敷跡・寺院跡等には銅の採掘と製（精）錬に関わる遺跡と考えられる。美都町内で所在が確認されている製鉄関連遺跡については、中・近世に営まれた「たたら」跡もしくは銅製（精）錬に関わる遺跡と考えられる。未発掘調査であるが、産業史・銅山史の解明に今後の調査が期待される。

３．調査対象地周辺（養老谷集落）と養老瀧伝説

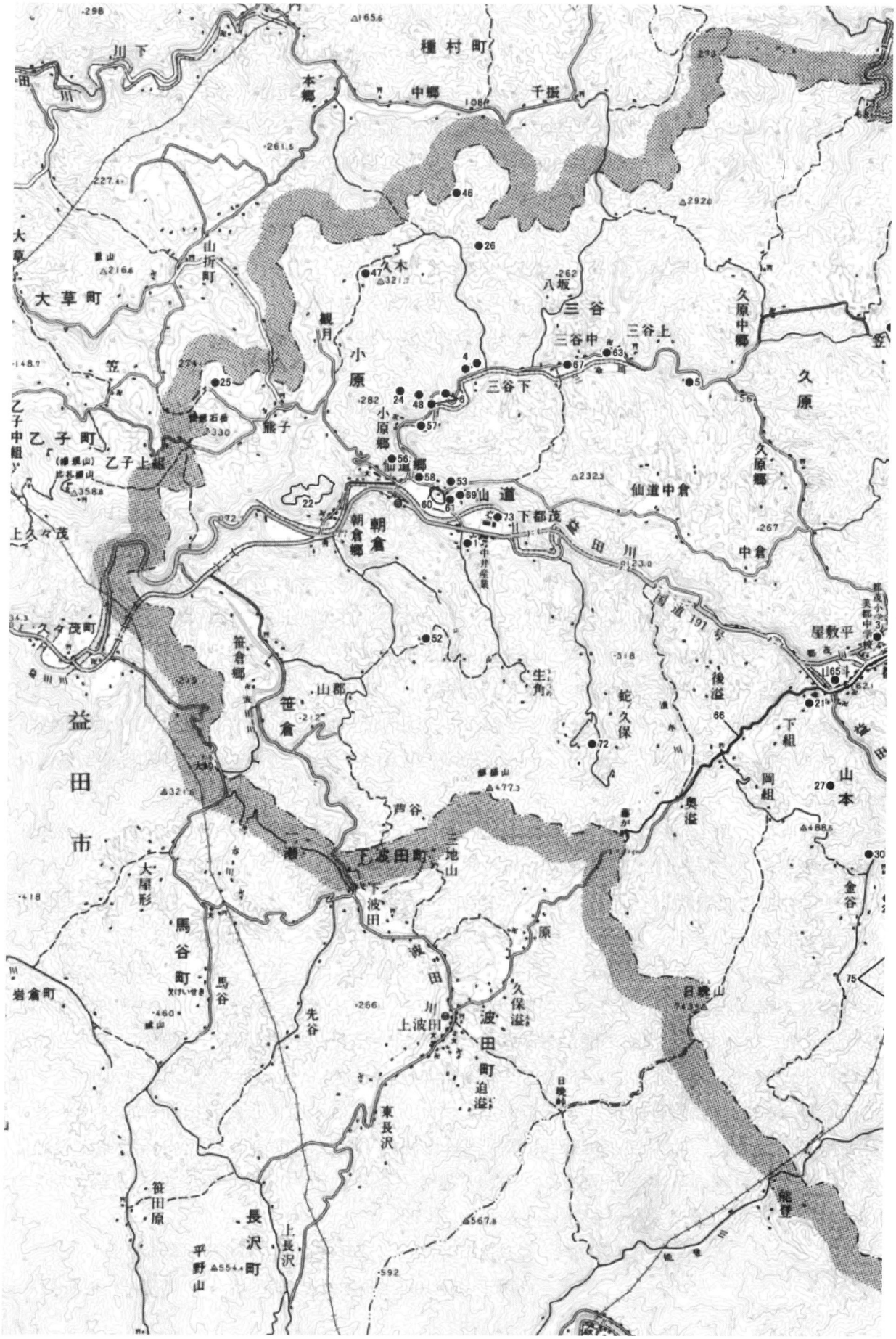
丸子山から川を挟んで北側には養老谷城がある。別名は潮城で、「要害」「城ノ平」「堀田平」「馬場」などの地名が残っている。潮氏は戦国時代頃、この地を治める牛尾氏が、養老瀧伝説に因み潮と改名したと伝えられている。

西側丘陵部には浄土真宗本願寺派養老山光雲坊（1700 年代創設）があったとされ、「寺山平」の地名が残る。その前面は「宮ヶ原」、「石木戸」である。

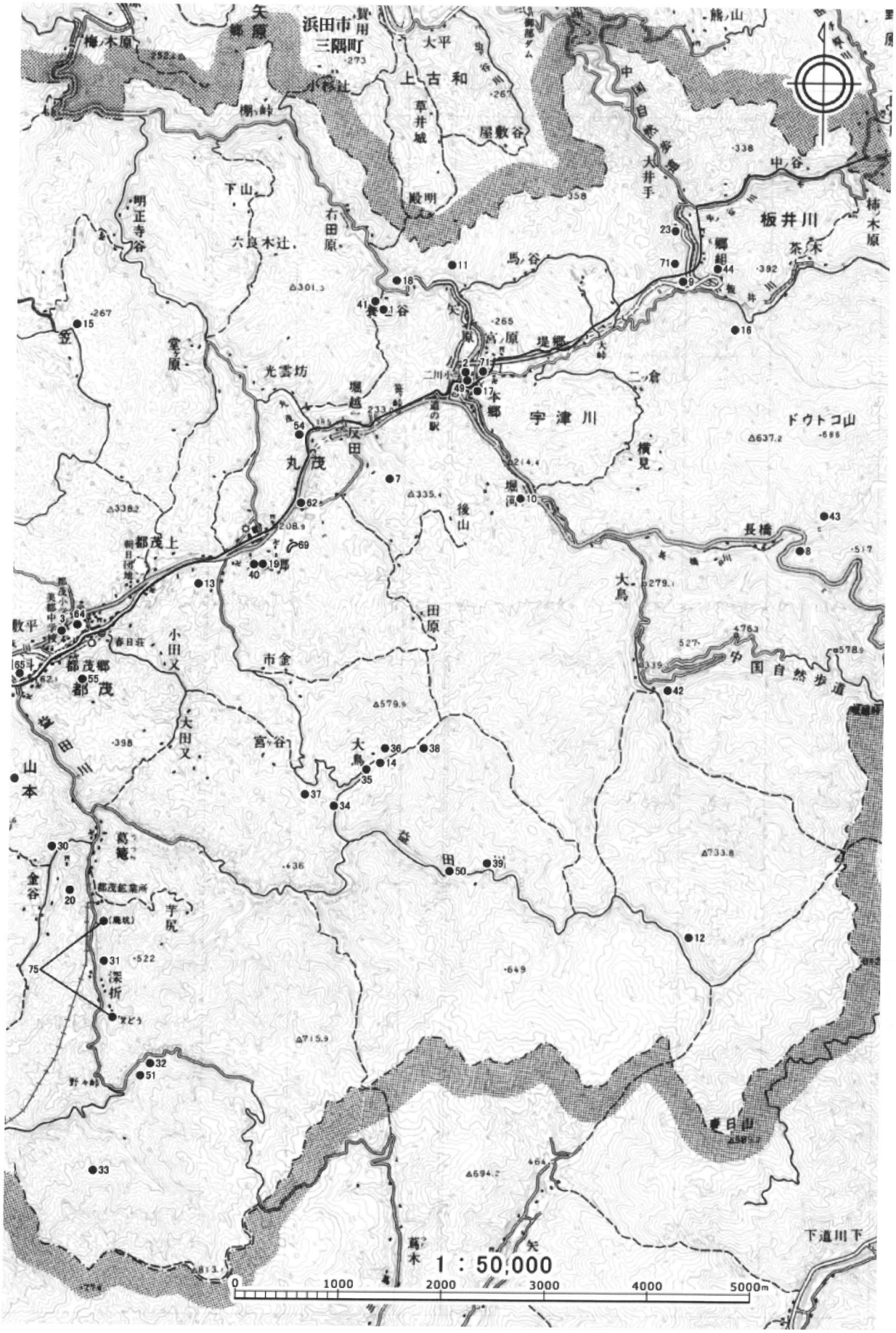
丸子山南側には丸茂地区へ通じる往還がある。その南端、矢原川左岸の養老谷集落南側山腹に熊野権現を祀る祠がある。「権現」の地名が残っている。祠のそばに大岩が突き出ているが、ここは「文徳実録」斉衡元年（854）七月二三日条の「石見国言、醴泉出、三日乃涸」の記述にかかわる瑞兆の滝「養老瀧」と伝える。「味、濁醪ヲ写シ、状ハ芳醴二凝ス」とあり、どぶろくのような味で、甘酒のような水が大岩の間から湧き出たことで、当時の美濃郡の大領が朝廷に献上したところ、朝廷では瑞兆であると非常に喜び、元号の仁寿４年を斉衡元年に改めるなどしたというのである。

嘉水６年（1853）に熊野権現社千年祭が執行され、この時に列席した波田神社宮司田中貢の記した「養老瀧醴泉記」も、「文徳実録」に拠る孝女伝説等を記している。付近には養老谷の地名、養老という家号、潮の苗字など伝説にまつわるものも多い。市の史跡に指定され、集落の養老瀧保存会により大切に管理され、秋に祭礼を行っている。

参考文献　鈴政信市著 1968『美都町史』美都町史編纂委員会
内藤正中編 1995『日本歴史地名体系 33　島根県の地名』平凡社



第２図　美都町内遺跡分布図１（東仙道・都茂）

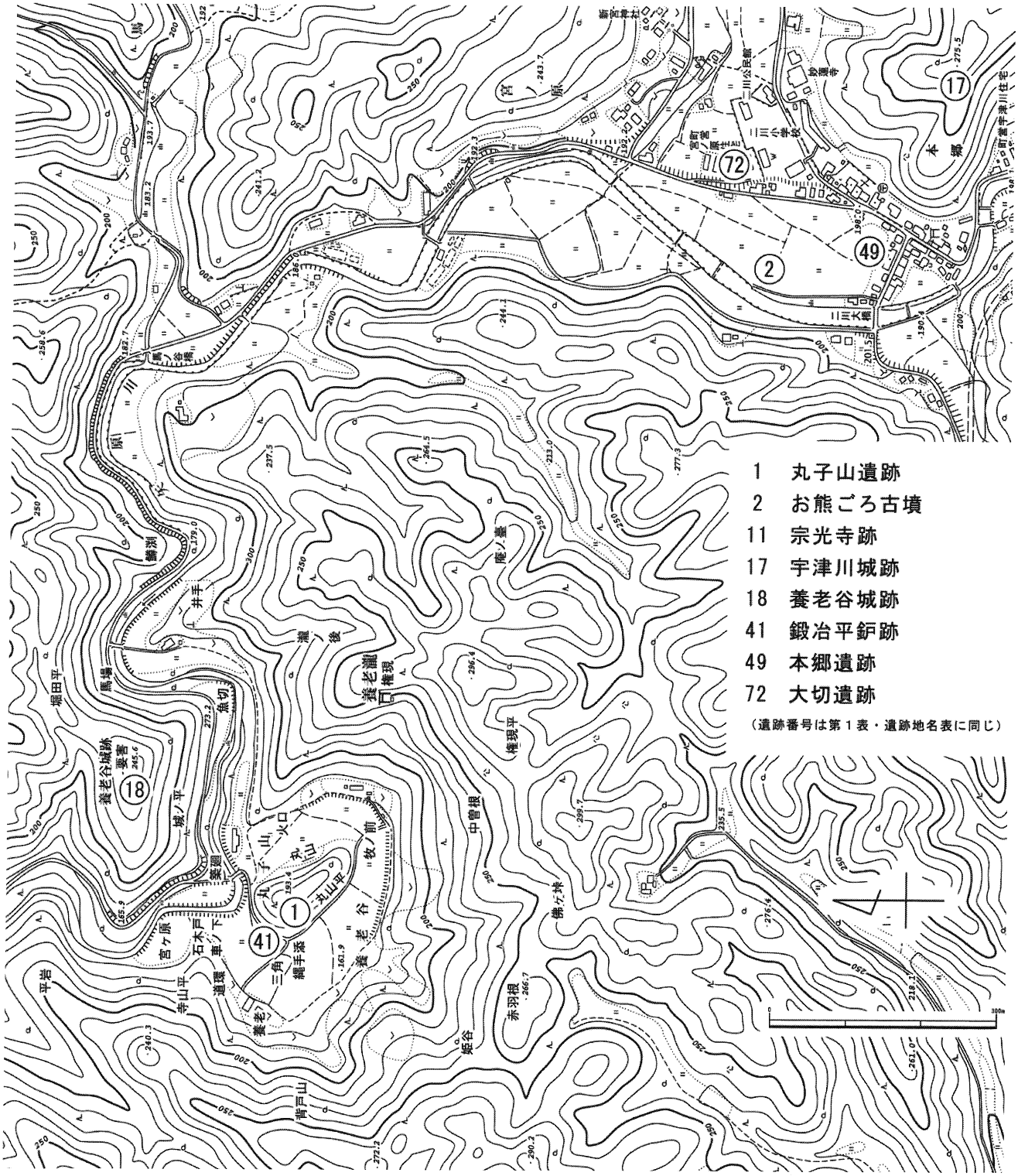


第３図　美都町内遺跡分布図２（都茂・二川）

番号	名　　称	種　　別	概　　要
1	丸子山遺跡	墓又は経塚	集石遺構、土師質土器壷、大銭、銭貨
2	お熊ごろ古墳	古墳	円墳、石積墳丘、消滅
3	屋敷平横穴・遺跡	横穴・散布地	土師器、石室、消滅
4	三谷古墳群	古墳	２基
-1	三谷１号墳	古墳	円墳、須恵器
-2	三谷２号墳	古墳	円墳、須恵器
5	都賀根城跡	城跡	刀剣
6	小原古墳群	古墳	２基
-1	小原１号墳	古墳	須恵器、消滅
-2	小原２号墳	古墳	円墳、消滅
7	丸茂上経塚	経塚	
8	長橋の庵寺跡	寺院跡	
9	恵則寺跡	寺院跡	
10	道智の庵寺跡	寺院跡	
11	宗光寺跡	寺院跡	
12	赤松谷上鈩跡	製鉄遺跡	
13	古城山城跡	城跡	
14	表屋鈩跡	製鉄遺跡	
15	鈩床鈩跡	製鉄遺跡	
16	板井川城跡	城跡	山城、郭、堀切、竪堀
17	宇津川城跡	城跡	山城、郭、堀切
18	養老谷城跡	城跡	山城
19	丸茂城跡	城跡	山城、郭、連続竪堀群
20	入船山城跡	城跡	山城
21	要害山城跡	城跡	山城、石垣、堀切
22	四ツ山城跡	城跡	山城、郭、井戸、竪堀
23	夏山墓地	古墓	五輪塔３基
24	掛所鈩跡	製鉄遺跡	
25	北ヶ溢鈩跡	製鉄遺跡	
26	新宅溢鈩跡	製鉄遺跡	
27	金ヶ崎鈩跡	製鉄遺跡	
28	火の迫鈩跡	製鉄遺跡	
29	金屋敷鈩跡	製鉄遺跡	
30	悪谷鈩跡	製鉄遺跡	
31	深折鈩跡	製鉄遺跡	
32	化粧谷鈩跡	製鉄遺跡	
33	吹屋床鈩跡	製鉄遺跡	
34	鍛冶屋敷鈩跡	製鉄遺跡	
35	大切鈩跡	製鉄遺跡	
36	床屋溢鈩跡	製鉄遺跡	
37	勝地鈩跡	製鉄遺跡	
38	田代鈩跡	製鉄遺跡	
39	鈩原鈩跡	製鉄遺跡	

番号	名　　称	種　　別	概　　要
40	馬頭鈩跡	製鉄遺跡	
41	鍛冶平鈩跡	製鉄遺跡	
42	大鳥鈩跡	製鉄遺跡	
43	ジャレ鈩跡	製鉄遺跡	
44	森平鈩跡	製鉄遺跡	
45	腰ヶ峠鈩跡	製鉄遺跡	
46	土井山城跡	城跡	
47	久木経塚	経塚	
48	竹城跡	城跡	
49	本郷遺跡	散布地	縄文土器、石斧、石鏃、須恵器 土師器、鏡、陶磁器
50	葛根薮経塚	経塚	
51	安養寺跡	寺院跡	
52	正明寺跡	寺院跡	
53	相続庵跡	寺院跡	古墓（品川大膳）
54	城ヶ谷城跡	城跡	山城、郭、堀切
55	都茂城跡	城跡	山城、郭、堀切
56	背戸山城跡	城跡	山城、郭、堀切
57	粟島原遺跡	古墓	青磁碗、白磁小皿、小壷、銅鏡、硯
58	東仙道土居遺跡	その他の墓	中国製壷、常滑系壷、土師質壷 宝篋印塔の一部、加工石（五輪塔一部）
59	水池遺跡	散布地	Ｒ60と統合
60	酒屋原遺跡	集落跡	縄文土器、弥生土器、須恵器 陶磁器、円面硯
61	前遺跡	散布地	縄文土器片、弥生土器片、土師器片
62	丸茂宮下遺跡	散布地	須恵器、土師器、陶磁器
63	専教寺下遺跡	散布地	須恵器、土師器、青磁
64	唐干田遺跡	散布地	土師器片、弥生土器片、陶磁器片
65	大年ノ元遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、陶磁器 土師器、銅滓、鉄滓
66	津和野奥筋往還	街道跡	近世街道跡
67	大石前遺跡	散布地	土師質土器、陶磁器
68	龍光遺跡	散布地	石積墓、弥生土器、須恵器、陶磁器
69	森下遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、礎石建物跡、須恵器 土師質土器、陶磁器、石斧
70	仙道宮ノ原遺跡	散布地	土師質土器
71	土井古墓	古墓	五輪塔２基
72	大切遺跡	散布地	土師器、陶磁器
73	殿明古墓	古墓	宝篋印塔３基
74	下都茂原遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、須恵器、土師器、 緑釉陶器、黒色土器、陶磁器、井戸
75	都茂鉱山	鉱山跡	

第１表　美都町内遺跡地名表



第４図　遺跡の位置と地形

第３章　調査成果の概要

１．調査区の概況

立地状況

調査区は、益田市美都町宇津川地区養老谷集落、矢原川が形成する小規模な盆地の中央部に立地する「丸子山」の山頂部である。標高は約 196ｍ、川との比高は約 40ｍである。

川を挟んだ北東方向には養老谷城（潮城）跡が位置し、西側丘陵部には浄土真宗本願寺派養老山光雲坊（1700 年代創設）があったとされ、「寺山平」の地名が残る。南側には丸茂地区へ通じる往還がある。四方を一望できる格好の場所である。

また、盆地南側山腹には市指定史跡「養老瀧」が存在し、熊野権現を祀る。この滝は、「文徳実録」斉衡元年（854）の石見国醴泉記述にかかわる瑞兆の滝と伝える。

山頂部における調査区では、祠跡とその背後に集石を確認した。祠の創建時期は定かではないが、廃絶は昭和初期である。祀られていた地蔵は江戸期のものと考えられるが定かではない。瓦については明治初期の石州瓦を含む。この祠は、背後の集石北側の一部を削って平坦面を造り創建したものと考えられる。西側には江戸期の墓と立石の墓が混在し、墓標には近藤家のものも確認できた。近藤家は明治初期、丸子山山麓にて鍛冶を経営した。その場所が鍛冶平鈩跡である。

ちなみに、南西部の尾根先端では集石はみられないものの、小規模な平坦面を確認できた。

調査前状況

調査前は、雑木が生い茂り、集石を太い根が覆っていた。後で触れるが、中央土坑内も根による攪乱が著しい。

調査経過

調査は、立ち木の伐採後に周辺の地形測量後、南北と東西の尾根主軸に沿ってサブトレンチを追加し、旧表土、地山までの土層確認を行った。

集石の記録については、次の状態で実施した。

第１段階：雑木伐採後の表出状態

第２段階：企画性をもって構築されたと考えられる状態

第３段階：敷石を検出した状況

集石中央には平石があり、その下から土師質土器の頸部が出土した。結果として、壷が埋置されており、底部から大銭を含む銭貨が出土した。その実測、取り上げを行い完掘後に旧地表の測量を行い終了した。

祠跡については、礎石を実測、取り上げを行った。その中央に直径約 20cm の土坑を検出したが、遺物は出土していない。祠跡の北側については、旧参道が残りさらに３ｍ下に、現状は竹藪の平坦面を確認した。付属施設の可能性を考え、約 10 ㎡のトレンチ調査を実施した。瓦が数枚出土したが、遺構は確認できなかった。

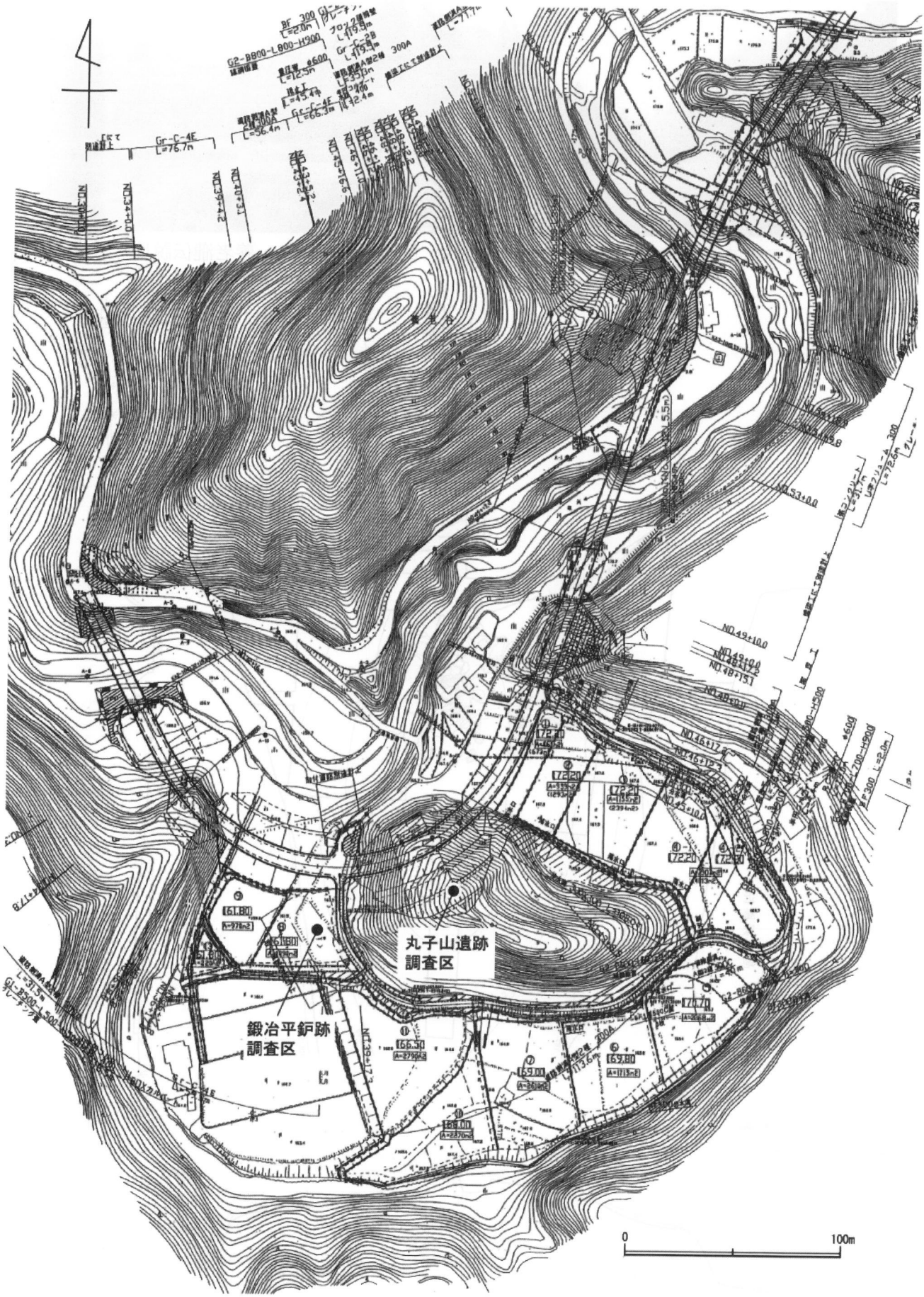
２．調査成果の概要

遺構等の概要は以下のとおりである。

中世の墓または経塚と考えられる集石遺構１基、近代の祠跡１基、近世の墓数基である。

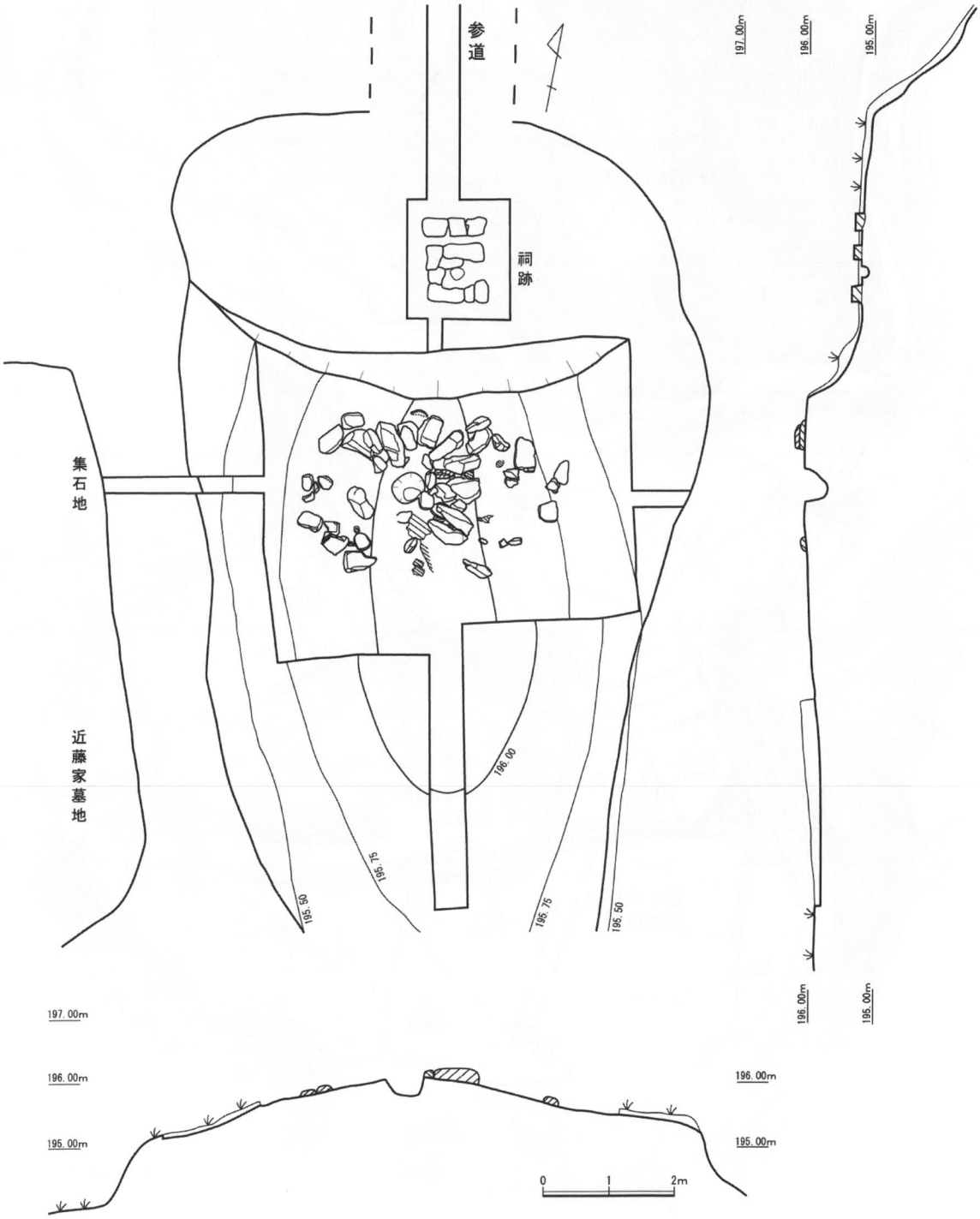
この丸子山は中世から連綿としてこの地域の墓所とされた場所であった。

周辺には養老谷城（潮城）跡、養老瀧伝説地としても知られる集落の一角で初めて行った本発掘調査で、遺構や遺物資料を得ることとなった。



第５図　調査区位置図

丸子山遠景（西から）左側奥：養老谷城（潮城）、右側奥：養老瀧伝説地



第６図　調査区位置図

３．遺構

集石遺構

形態・規模

集石の形態は、ほぼ円形もしくは多角形を呈すものである。ただし、北側については祠跡が残る平坦面造成による掘削を受け、南西部の集石については、祠の礎石や南西部の近世墓石に使われており、残存していない。

集石規模は、東西約４ｍ、南北推定約４ｍ。東西の側面には平石が確認でき、それは土留めや区画を示すものと考えられ、それらを含めると、東西約５ｍを測る。残存の高さは中央部で約40cm を測る。

築成

集石は、まず、山頂部の地山を削りだして整え、約 20×60cm の川石を花弁状に配し、その上部、周辺に拳大の石を敷いている。その範囲は東西約４ｍである。そして、約 30×30 cm の角・円状石で上位を覆う構造と推測される。裾部には区画を示す平石を配すが、確認できたのは、東部、西部、南東部のみで、周辺にも原位置を示さない平石が多くある。

集石中央部にも平石があり、その下から土師質土器が出土している。その平石は、配石上面レベルと水平に配されたと考えている。土器の埋置と花弁状の配石との築成順序は土層から判断できなかった。

中央土坑

中央土坑は、土師質土器壷が埋置されたものである。規模は直径約 30～40cm の深さは約 20cm 程度である。よって、壷の復元器高が約 43cm であるので、壷の下半部のみが地中に埋まっていたことになる。

土師質土器壷の埋置構造と銭貨の出土状況

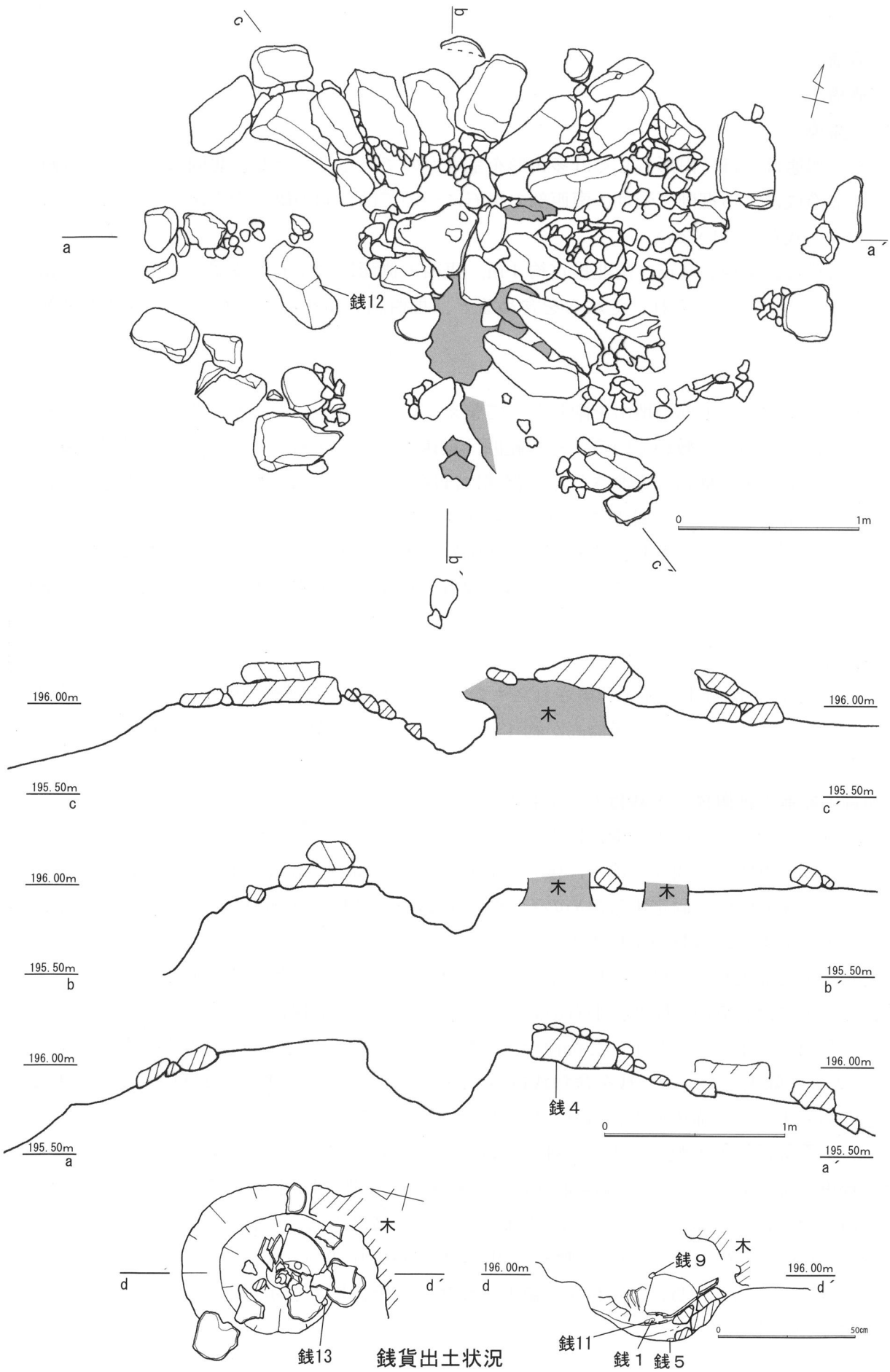
土師質土器壷は、木の根の攪乱により、東側底部の一部のみが原位置をとどめていた。

また、壷の東側は隙間なく地山に接しており、その隙間から銭貨が１枚、南側は根が覆っているものの、壷の側面を固定するための石の間から銭貨が２枚、底部が平らな壷を埋置するために整えた土の最下部に銭貨が１枚出土している。

集石の中央部上層から破片を取り上げていったが、その破片の間から銭貨が６枚出土している。それらの下には約５cm 程度の小石が詰まっていた。これが意図的なものなのかは判断できなかった。ちなみに小石を取り上げて洗浄を試みたが、文字などは見受けられなかった。その下の約５cm の土を除去した後、大銭を含む銭貨が 12 枚見つかった。大銭は、ほぼ中央で２枚重なっているうちの下位で、壷の底部にはりついていた。

壷の上半部は拳大の敷石によって埋められていたと考えているが、壷胴部片の出土状況やその３割程度が見当らないこと、南西部の配石は後世に祠や墓に転用されていることを勘案すれば、根の攪乱以外に、後世における人為的な壷上半部への攪乱も考えられる。

なお、東側の配石の下部、西側の敷石の間、南西部の攪乱部から銭貨が１枚ずつ出土している。これらのことから、銭貨は、方位を意識した使用、または境界を示すために撒いたと考えられるのではないだろうか。



第７図　集石遺構図及び中央土坑内遺物検出状況

４．出土遺物

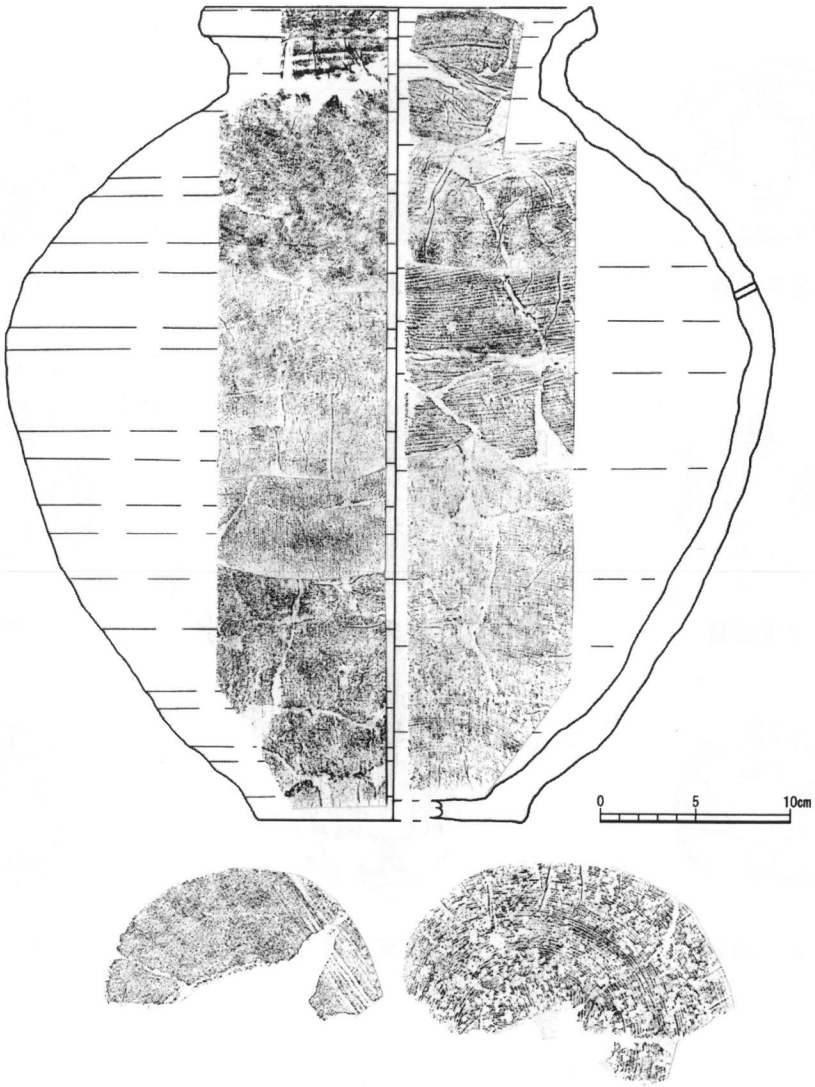
遺物は、集石の中央土坑から出土した土師質土器の壷と、その内部や集石周辺から出土した銭貨である。

土師質土器壷

復元された器高は、約 43cm 、胴幅約 41cm 、口径は 20.5cm 、底径は 14cm を測る。焼成はほぼ良好で、胎土は密である。出土した破片は、全体の８割を接合・復元が可能であった。しかし、口縁部は８割、胴の上半部は３割が欠損している。胴部に対し、口頸部は短く、口縁部は玉縁状に肥厚し、口唇部はやや尖り気味で丁寧に仕上げられている。

内外面共にろくろによるナデ調整が丁寧である。外面肩部は、やや張った印象を受け、一箇所穿孔がみられる。底部にはヘラおこし痕が残り、中央部は復元時に破片が無いこと、器壁の断面が古い印象を受けることから、大きく穿孔されていたと考えている。内面は、ほぼ全面にハケ目を施し、上半部と下半部の継目が明瞭である。色調ついて、外面は鈍い黄褐色を呈すが、胴部の一部が灰褐色に変化している。内面は黄褐色である。

産地、時期については、近隣に類例が得られておらず、不明である。在地産の可能性があるが、全体的に丁寧に仕上げられている。

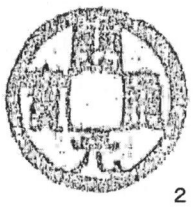


第８図　出土遺物実測図１

1

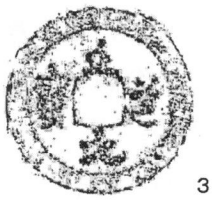
崇寧通寶

0 1 2 3cm



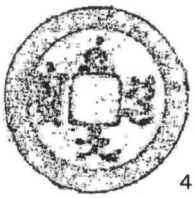
2

開元通寶



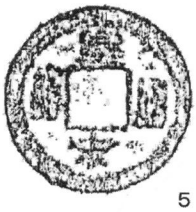
3

至道元寶



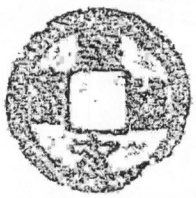
4

至道元寶



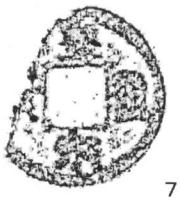
5

皇宋通寶



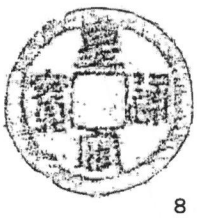
6

皇宋通寶



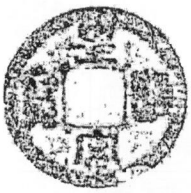
7

皇宋通寶



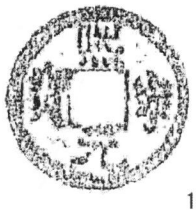
8

皇宋通寶



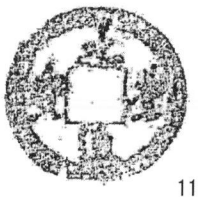
9

皇宋通寶



10

熙寧元寶

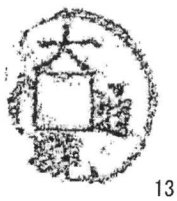


11

元豊通寶

12

聖宋元寶



13

大観通寶

第９図　出土遺物実測図２

銭貨

銭貨は集石周辺から合計 25 枚出土した。そのうち、腐食が著しく、取上時や整理時に消滅したものもあり、図示したものは 13 枚である。また、火を受けた感じは見受けられない。

１は大銭「崇寧通寶」である。通常の小平銭よりひとまわり大きく 3.5cm を測る。初鋳年は 1102 年である。7.1ｇである。２は唐銭、３～13 は北宋銭である。詳細は、第２表、第３表に記した。

銭径・内径・銭厚:cm

挿図番号	出土位置	銭名	銭径	内径	銭厚	量目(g)	書体	初鋳年	備考
1	壷底最下部	崇寧通寶	3.5	3.2	0.25	7.1	楷書	1102	大銭
2	壷破片中	開元通寶	2.4	2.1	0.11	1.8	隷書	621	
3	壷破片中	至道元寶	2.5	2.3	0.13	3.1	草書	995	
4	東配石下	至道元寶	2.5	2.4	0.14	2.3	楷書	995	
5	土坑最下部	皇宋通寶	2.5	2.1	0.11	2.7	楷書	1038	
6	壷底部	皇宋通寶	2.4	2.1	0.15	2.3	楷書	1038	
7	壷底部	皇宋通寶	2.5	2.1	0.13	1.7	篆書	1038	
8	壷底部	皇宋通寶	2.4	2.1	0.13	2.2	篆書	1038	
9	壷東外部	皇宋通寶	2.4	2.1	0.12	1.9	篆書	1038	
10	壷底部	熙寧元寶	2.4	1.9	0.09	2.9	楷書	1068	
11	壷底部	元豊通寶	2.4	1.9	0.13	2.3	行書	1078	
12	南西攪乱部	聖宋元寶	2.4	1.9	0.09	1.8	行書	1101	
13	壷南固定石	大観通寶	2.4	2.1	0.12	1.3	楷書	1107	

第２表　出土銭貨観察表

種類	初鋳年	枚数	時代	備考
開元通寶	621	2	唐	
至道元寶	995	2	北宋	
皇宋通寶	1039	6	北宋	
熙寧元寶	1068	1	北宋	
元豊通寶	1078	1	北宋	
崇寧通寶	1102	1	北宋	大銭
聖宋元寶	1101	1	北宋	
大観通寶	1107	1	北宋	
不明	－	10		
合計		25		

第３表　出土銭貨枚数

第４章　まとめ

調査箇所は益田市美都町宇津川地区養老谷集落、矢原川が形成する小規模な盆地の中央部に位置する「丸子山」（標高約 196ｍ）の山頂部である。

川を挟んだ北東方向には「養老谷城（潮城）跡」、南側には丸茂地区へ通じる往還、北側丘陵部には浄土真宗養老山光雲坊（1700 年代創設）があったとされ、「寺山平」の地名が残る。

また盆地南側山腹には市指定史跡「養老瀧」が存在し、熊野権現を祀る。この滝は、「文徳実録」斉衡元年（854）の石見国醴泉記述にかかわる瑞兆の滝と伝える。

山頂部における調査地では、祠跡とその背後に集石を確認した。

集石は、約 20×60㎝ の川石を花弁状に配し、その上部や周辺に拳大の石を敷き、さらに 30×30 ㎝の角・円状石で覆う構造であった。

遺物としては、集石中央部から土師質土器の壷が出土したが、その産地・時期は不明である。

内部には、出土位置は纏っていないが、銭貨が納められ、特に大銭の「崇寧通寶」1 枚を含んでいる。銭貨は、確実に壷の外部での出土は４枚で、周辺部出土のものも併せて 25 枚であった。

銭名が判読されたものについていえば、鋳造年代から 12 世紀初頭が上限である。ただし、これらの遺物は伝世、経年使用が充分考えられ、検討を要する。また、壷上半部片の出土状況やその３割程度が見当らないこと、南西部の配石は後世に祠や墓に転用されていることを勘案すれば、根の攪乱以外に、後世における人為的な攪乱も考えられる。

大銭は、一般の集落で出土する銭貨ではなく、西日本を中心とする都市、墓、経塚、祭祀遺構などで単独で出土する例があり、経済行為とは別の付加価値をもって１枚単位で使用されている場合が認められている。全国における出土枚数は 200 枚程度で、島根県内では、市内の沖手遺跡、浜田市の古市遺跡で出土例がある。いずれも中世前半を盛期とする地域の拠点的な遺跡である。古市遺跡ではピットの下部に単独で出土し、何らかの祭祀に関わる使用と考えられている。

これらのことから、中世における墓もしくは経塚の可能性がある。

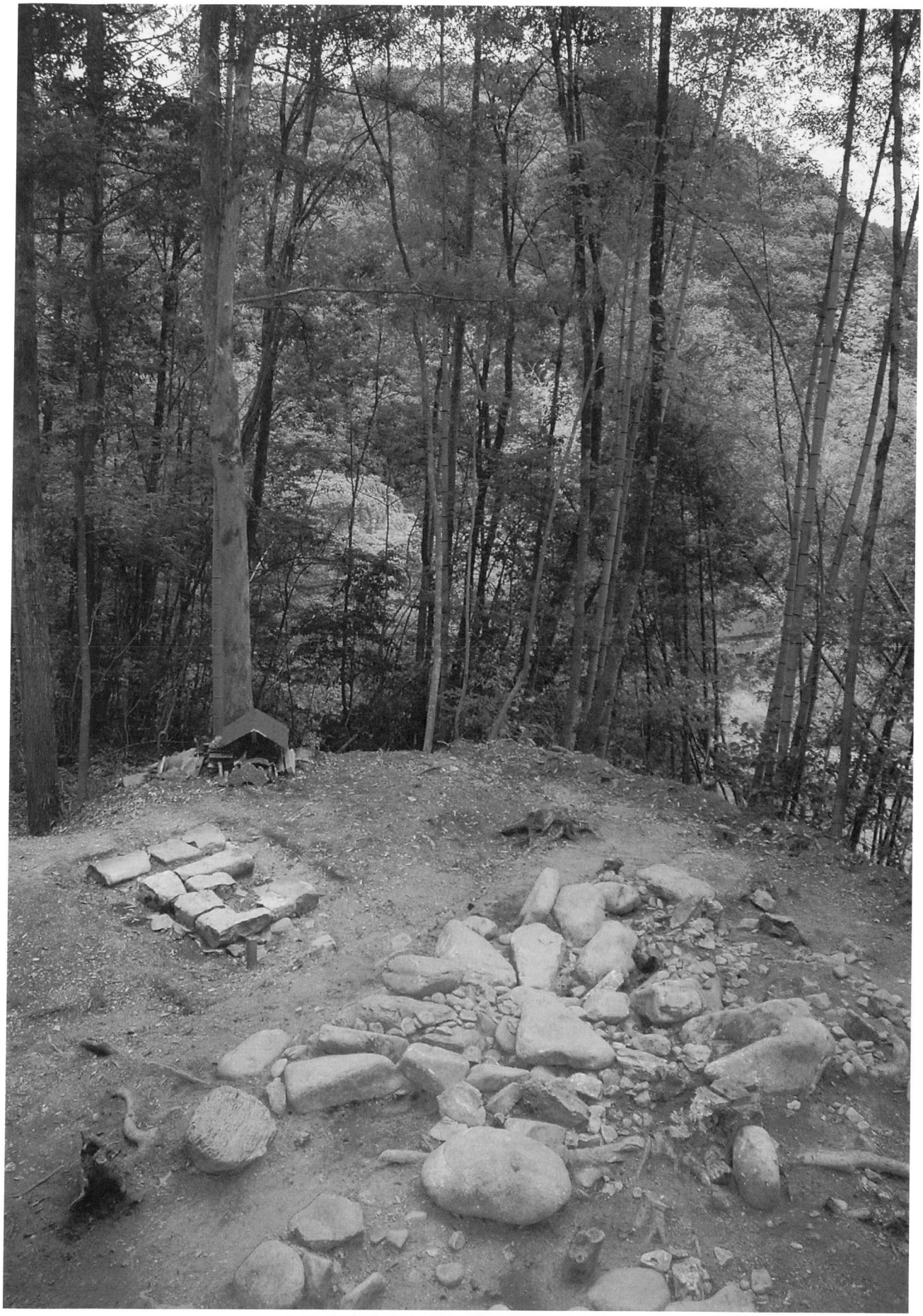
経塚であれば、周辺の拳大の石に文字は無く、共伴品（鏡・剣）が無いことから、決定打が弱い。また、中世墓における花弁状の配石は中国地方では類例を求めることができていない。縄文時代の配石遺構を想像させるこの集石は、四方を見渡せ、この地域における何らかの信仰に対する祭祀遺構の可能性もある。今後の資料の追加を期待したい。

また、配石や銭貨の出土状況が方位や範囲を意識していると考えられるものの、中世の宗教的、あるいは祭祀的な視点からの検討をすることができていない。今後の課題としたい。

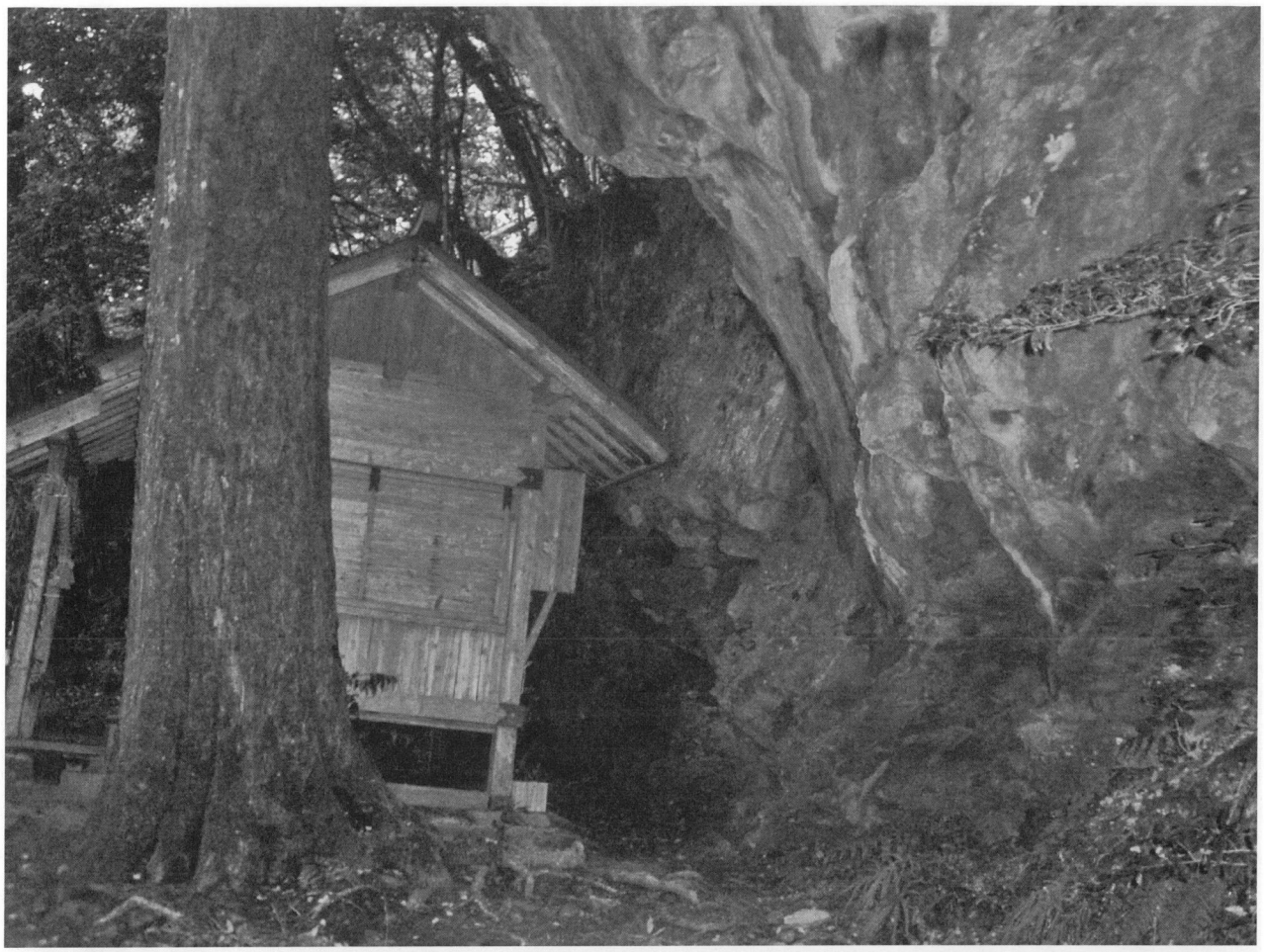
周辺の中世から近世における領主は潮氏と伝えられている。集落内の寺社、山城等には潮氏が関与しているものが多い。今のところ本遺跡と潮氏を結ぶ時期は異なるが、何らかの関連性も含んでおきたい。

養老瀧伝説に象徴されるように、古代から中世にかけて中央政府と当地方との流通や政治的関連性を垣間みることのできる貴重な資料を得ることができた。

最後に、現地調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々の御指導と御協力いただいた各位に深甚の謝意を申し上げる次第である。



丸子山遺跡から見た養老谷城（潮城）

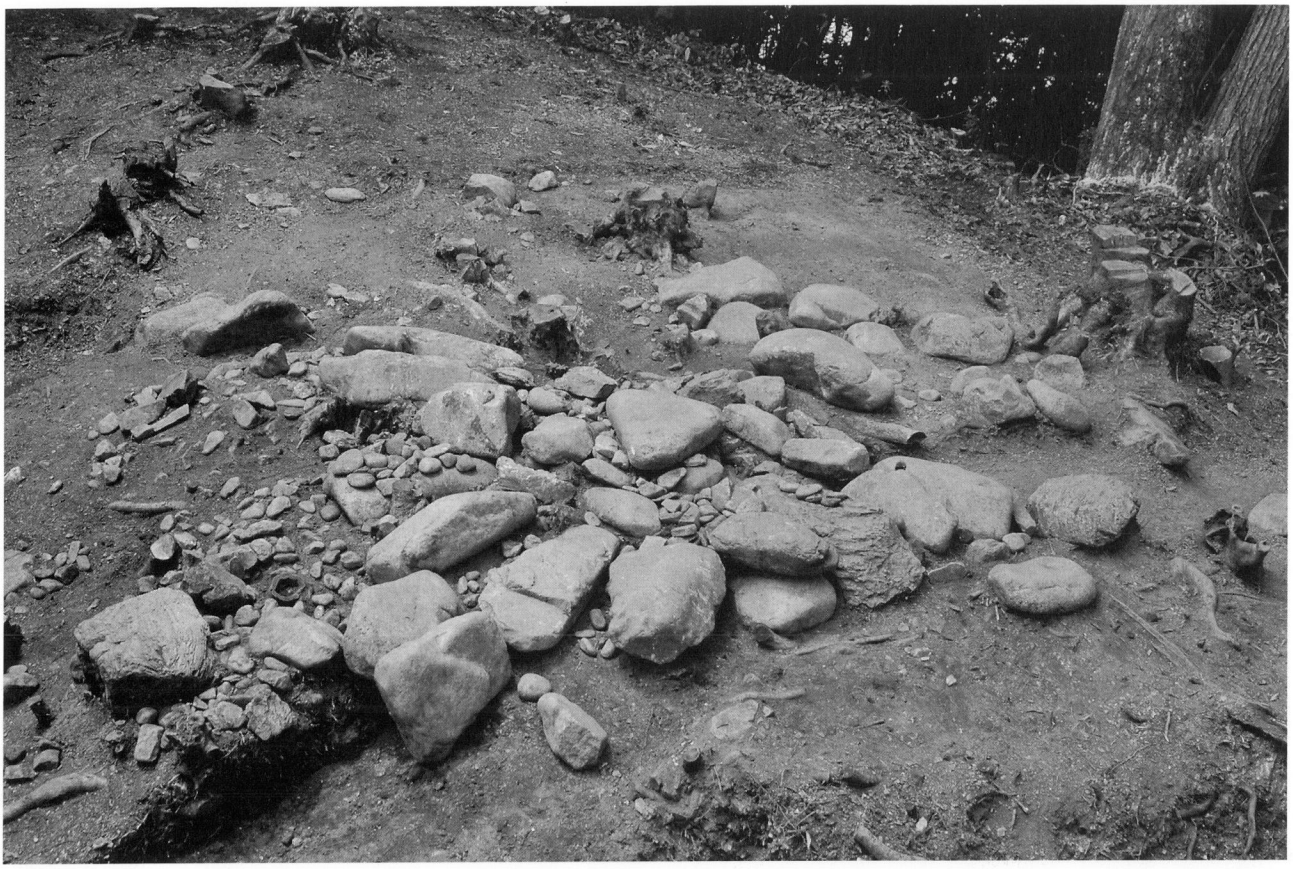


養老瀧伝説地（大岩、祠、大銀杏）

丸子山遺跡調査前（北から）

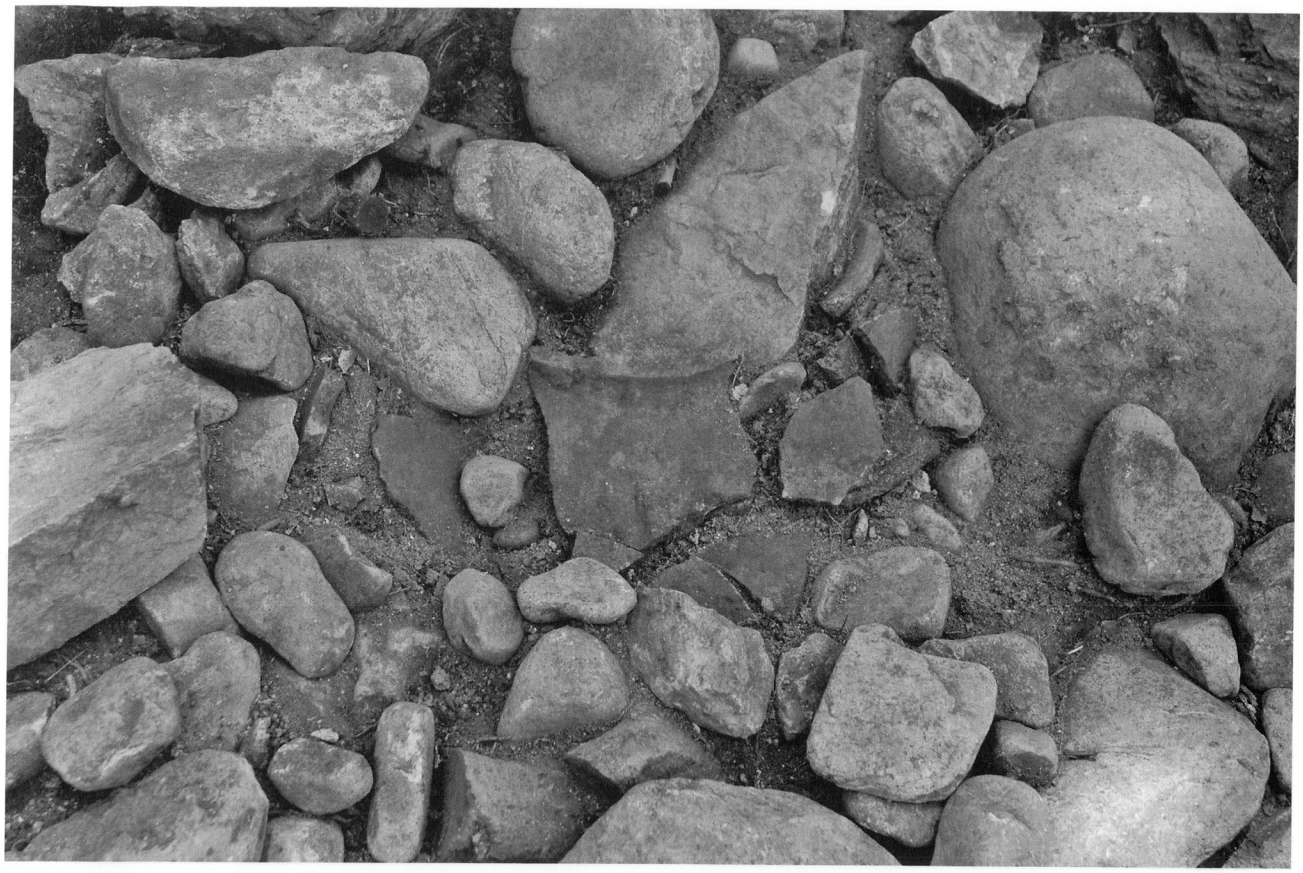
調査地遠景　雑木伐採後（南西から）

調査地遠景　敷石検出状況（南西から）



集石検出状況（北から）

集石検出状況（南から）



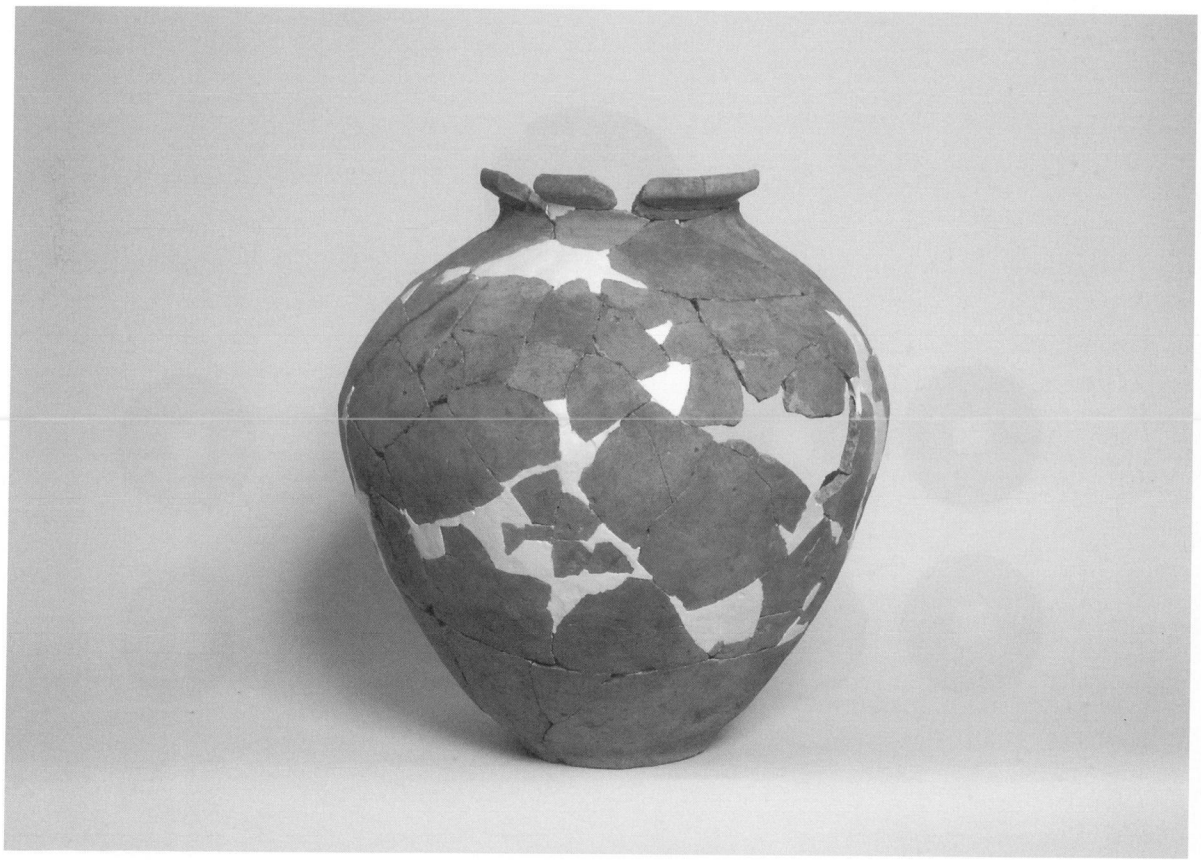
配石中央平石除去後　土器出土状況（北から）

中央土坑内　銭貨出土状況

配石中央　遺物出土状況（西から）

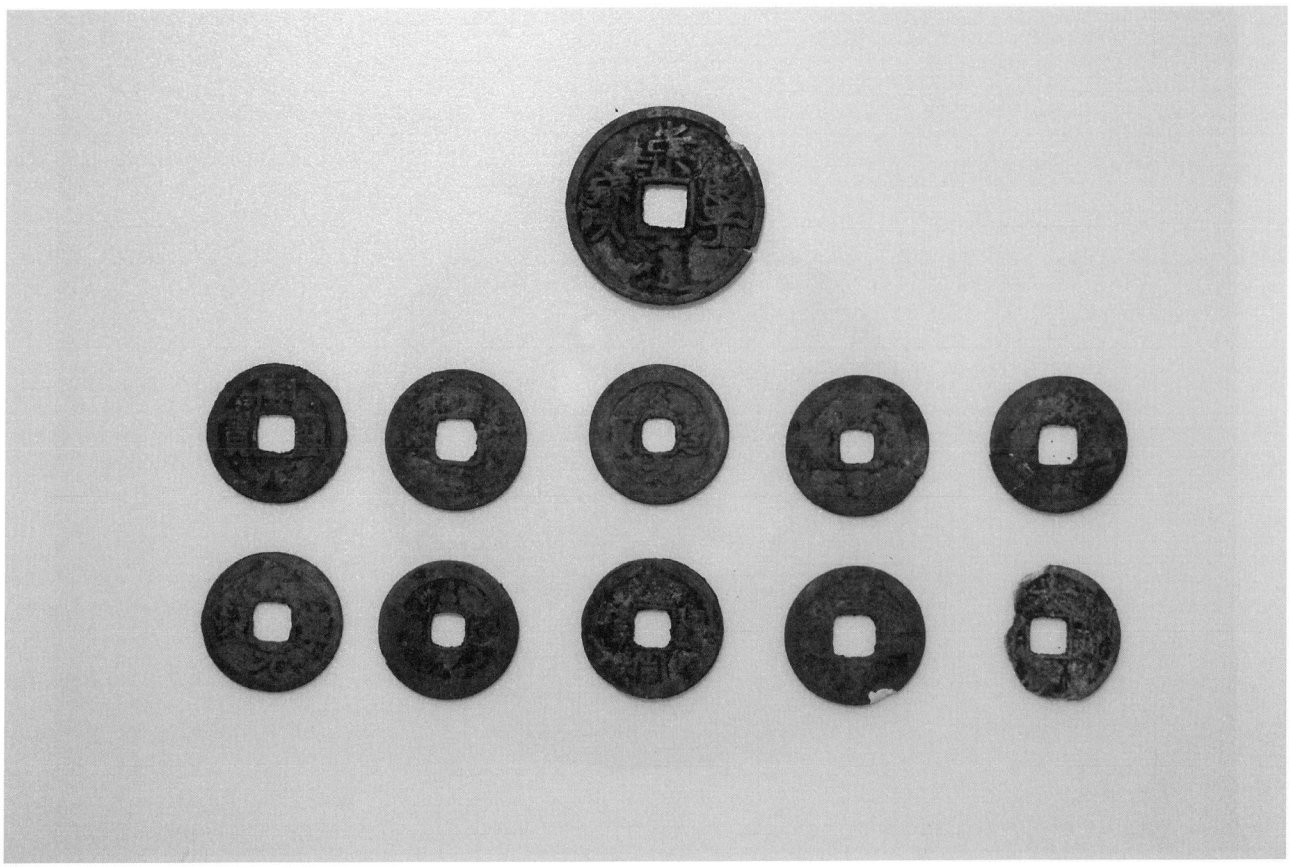
土師質土器内銭貨出土状況（西から）

中央土坑完掘状況（南西から）



土師質土器壷

壷底部　内面



銭貨と大銭

報告書抄録

ふりがな	まるこやまいせき
書名	丸子山遺跡
副書名	県道三隅美都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	大野芳典
編集機関	益田市教育委員会
所在地	〒698-0033　島根県益田市元町11番15号　TEL 0856－31－0623
発行年月日	2010年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丸子山遺跡	島根県(しまねけん) 益田市(ますだし) 美都町(みとちょう) 宇津川(うつかわ)	32204	R74	34° 41′ 46″	132° 0′ 58″	2007.7.2 ～ 2007.9.30	100 ㎡	県道改良工事

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丸子山遺跡	墓又は経塚	中世	集石遺構	土師質土器 銭貨・大銭	花弁状に配石された集石遺構 土師質土器壷底部に大銭を含む銭貨

丸子山遺跡
－県道三隅美都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘掘調査報告書－
平成22年3月発行
編集・発行　益田市教育委員会
島根県益田市元町11番15号
印刷　のさか印刷